

盆と正月（61・8・16）

横田 健一（昭12文甲）

只今、阿部様から御紹介を頂きました横田でございます。本当は日本の古代史が専門で、文化人類学とか、フォークロアは、第二の専門、副業の方です。京都大学の国史と言いますか、史学科の国史科では、私の恩師西田直二郎先生は初代教授ではなく、初代は三浦周行、内田銀蔵、両教授でした。その国史の第一回卒業生西田直二郎という先生は、三高を明治四〇年に出られた先生であります。私共は京都大学の史学科におりました時には、三高を出られた浜田耕作先生はたしか阪倉篤太郎先生と同期の明治三五年の御卒業と承っています。私共が、一回生の時に総長になられ、一年後に亡くなられ、私の二回生の時に、羽田亨先生が、総長になられました。羽田先生は明治三八年に三高を御卒業。西田先生が明治四〇年に、助教授の中村直勝先生が、三高は明治四五年度の御卒業という三高ゆかりの先生方に、史学を教はったのであります。その西田直二郎という先生が、大正九年に在外研究員でイギリスのケンブリッジ大学の社会人類学研究所で、

アルフレッド・C・ハットン或はW・H・R・リーバースなどの教授について社会人類学をお修めになりました。そういう所から、東京大学の国史科は政治史、制度史、法制史といった様な、いわゆるフェアファツングスゲシヒテ (*Verfassungsgeschichte*) とでもいう様なものに伝統があるのに対しまして、京都大学の国史科は、文化史に伝統がございませぬ。尚西田先生は、ケンブリッジ大学の後で、ベルリン大学において、文化史の理論をクルト・ブライジツヒ教授について、おやりになったんです。そういう伝統がありまして西田先生がイギリス及びドイツからお帰りになりまして養成されたお弟子の先生方には、フォークロアをやるような伝統、或は文化人類学をやる様な伝統ございまして、京都大学教養部の教授であつた柴田実先生。ここに御出席の奥田東先生と同期ですね。たしか御存知と伺つておりますが、この柴田実先生もフォークロアをおやりになりまして、又同期の三品彰英先生、柴田先生、或は貝塚茂樹先生等は皆さん大正一四年に三高出られて、昭和三年に大学を出られたんですが、皆さんがそういう風な方法論をおとりになつておられます。その一年後の森鹿三先生もやはり京都大学の教授ですが、森先生（三高は大正一五年）も東洋史をおやりになりましたが、やはり民俗学的方法で研究をおやりになった。そういう伝統があつて、私共もそういう風な勉強を自然とやる様になりました。

西田直二郎先生が、私共の学生の頃に、柳田国男というフォークロアの大家を、集中講義でお呼びになつたり、それから私共講義は伺いませぬでしたが、西田先生と三高の同級に宇野円空と

いう東京大学の宗教学の教授がおられ、私が入学する前に京都大学へ講義においてなっています。それから西田先生の大阪の天王寺中学の同級生で折口信夫という、国学院大学の教授でフオークロアの大家が、おられます。その先生を昭和一四年に集中講義にお呼びになったり、そういう講義が、大変多かつた時代です。

前置が長くなりましたが——今日はお盆です。民俗学という学問は、お盆や、正月や節分や新嘗祭とか、七夕とか、三月三日のひなの節句、五月五日の端午の節句の様な年中行事を研究します。も一つは、通過儀礼という言葉をフランスの、ファン・ゲネップがい、だして、レ・リールト・デ・パッサージュ (*A van Gennep "Les Rites des Passages."*) つまり誕生から成人式から或いは結婚、葬式死後の先祖のおまつりといった様なものを、或いは農民、或は漁業や山できこりをやる様な人、或は狩人なんか、色々な生活習慣をもっております。そういう民間の風俗、習慣の様なものを研究するという風な事に、なつてまいりました。

こういう学問は大体一九世紀の半頃からヨーロッパにおいて特にイギリス、フランス、北欧あたりで盛んにやつて参りました学問です。我々が平素やつておる事で、何の意味もわからないでやつておる事について、なぜそういう事をやるのかという理由を考えようというのです——。たとえば、我々が神社にお参りを致しますと、どういう事をやるか。お手洗鉢で手を洗い、口をすすいで、浄めて今度は、おさい銭を上げる。そして鈴のついた繩を、ガチャガチャと振りますと、

カラカラという。それから柏手を打って拝む。何故そういう事をやるのかと言うと、神様の前に出るんですから手を净め、口を净めるというのは、当然でありますがおさい銭を上げるというのは、お金などができる前はどうかとい、ますと、「和同開珎」というお金が、できる千二百八十年前迄は何をやったか、というとお米を撒いていたんです。

お米でなくても、麦を撒いても、豆を撒いてもい、んで、豆を撒くのは節分に御承知の通り「福は内、鬼は外」といって豆を撒くと、鬼は逃げていくと、いう風にはれております。お米なり、麦などはその内に一粒まけば、50粒にも100粒にもなるすばらしいエネルギーが含まれていると、古代人は考えたわけで、それを投げつけられると、そのエネルギー、力によって、鬼は逃げていく。鬼というのは冬です。節分はちようど冬という季節と春という季節の境目でございまして、冬の季節の終る二月三日のその晩、冬という鬼が追払はれますと、翌日春という福が入ってくる。「鬼は外」というのは、冬は外に逃げていけ、春よこいというわけで立春の行事をやるという事で、お米をまく散米を豆でやっておるのです。ガラガラと鈴を鳴らしますのは、その音を聞くと神様が、その音に応じて、くだってこられるという事です。

神前結婚式などにいられると、ガラガラはやりませんが、最初に、神主さんが先ずおほらいをやって、その辺を净めてから降神の儀をやりませう。神主さんが、「オーオーオー」と三べん唱えますと、神様がスーッと下りてこられる。終りますと昇神の儀で、又神主が「オーオーオー」と、

三べん唱えますと、又、神様がスウーツと昇っていかれてお帰りになる……。これを警蹕けいびつといいます。これは天皇が、出行なされる時でも、古代においては警蹕を薩摩隼人が、吠声ばいせいを唱えるという形式でやったと「延喜式」に書いてあります。バイというのは、口へんに犬という字で、吠える声を隼人が唱えた警蹕のオオーという声が、犬の吠え声みただったんでせう。警蹕を唱えて神様が降りてこられたので、初めて神様に御挨拶を申し上げる。この柏手かしわでというのは、古代の挨拶の仕方であります。「魏志倭人伝」という日本の事を書いたのでは最も古い三世紀の中国の本があります。それをみると、倭人の国では、身分の低いもの、下戸が、それが大人、えらい人にあうと、柏手を打って挨拶するとあります。千七百年前の挨拶の仕方を神様に対してやるという事です。民俗学という学問は、日常やっている事で、我々が気のつかん事を何故そんな風にやるんだらうという意味を考えるのです。だから学問といっても素朴なものでして、毎年十月初旬に民俗学の大会をやっておりますが、普通の学会でありますと大学の教授や研究所の所員とかいう人ばかりが集まられるんですが、この学会には民間の農民や商売などをやりながら研究している人が多く集まります。

さて何と申しましてもそういう年中行事の中で、一番日本人が古来一番大切にしてきましたのは盆と正月であります。

正月を先に言わないで、盆の方を先に申します所が、ちょっとおもしろいんです。

お正月とい、ますのは、皆様も御存知の様に歳神様、歳徳神がやってこられるという風に世間では申しております。そのお正月の神様、歳神様、歳というのは実は、大歳の神、御歳の神という神々「古事記」にも出て参ります。実はお米の神様です。古代では正月に穀神をお祭りするだけではないんであります。万霊を祭る、萬づの霊を祭るといふ事が、平安初期に著された「日本靈異記」景戒という坊さんが書いた仏教説話集ですが、それに二ヶ所お正月の用意をするために、これは備後の国と山城の国の二つの話がで、るんです。前者によると、お正月用の物を買いにいく人が野宿をしますと、夜中に痛い、いたいと声がかかりますので、かたわらを見ますと、どくろがころがっている。どくろの眼の処から草が出てる。その草を抜いてやるとどくろが非常に喜んで「今日は大晦日だから一つお札にごちそうをしよう。自分の家はどこだからそこへ行ってくれば自分用のごちそうが、あるのでそれを食べてくれ——という風に靈魂が言うんです。言はれた処へ行きますと、部屋の中に、沢山の死者の靈魂を祭るごちそうが並んでいる。それを食べているとその家の人がやってきてどうしたんだという。実は、靈魂が、どくろの眼にさ、っている草を抜いてやってくれというんで、抜いてやったら大変喜んで御札に自分用に供えられたごちそうがあるから食べてくれというんで食べているんだ——といった話です。そのどくろというのは実は、自分の兄と外出した時に兄に殺された。その殺した兄も、そこへきていて親に罪がわかった。こう言う話が出てるんです。それでその「日本靈異記」によると、大晦日は、おおみそか万霊を供

養する日だと云うことが書いてあります。大みそかというのは、万霊を供養する。つまりお正月がその日が暮れたらそこからお正月、新年が始まるのです。古代人にとっては、日が暮れるとその日が終って、次の日が始まるんです。だから年越そばは大晦日の晩から食べる新年のごちそうなのです。

私は二十数年前から私の家に外国人をホームステイでおいているんです。今、タイ、韓国、香港の中国人がいます。今まで四十数人の十数ヶ国の人をホームステイでいたんです。一番多いのがアメリカ人で、イギリス、フランス、スイス、デンマーク、オーストラリア、スペイン、オランダなんかも……。それからアジア系では、韓国、中国、香港、台湾、それからベトナム、マレーシア、タイは三・四人おります。マレーシアも三・四人、ベトナムは二人で、ベトナム戦争の間はお正月や夏休み帰れません。お正月へ帰れないので私の家で一緒におせち料理、お雑煮など食べさせて、ベトナムでお正月は、どう云う日なんだと聞きますと、お正月というのはあらゆる霊が帰ってくる。御先祖が帰ってくる。先祖の外、いろんな霊魂が帰ってくる日だと……。そういう事を申ししておりました。なる程これは日本の古代とよく似ているんだなあと感心したんです。

お盆というのも実は元来、万霊を供養する日だったらしいんです。お正月から丁度半年を隔てまして、お盆です。盆は七月十五日、それを関西では一ヶ月ずらせまして、陰暦の七月十五日

に相当する八月十五日にやっております。東京では新暦でも七月十五日でやっておりますが、関西は八月十五日になっております。

これは仏教では、仏説盂蘭盆経と云うお経がありまして、そのお経によりますと、お釈迦様に偉いお弟子が十人おられまして、その中にモクケンレンという方がいらして、モクは目玉の目、ケン牛へんに建築の建（健）、レンは連なるという字、目健連尊者とも言っております。目健連尊者があるとき、六道、天道とか、地獄とか畜生道とか、修羅道とか、餓鬼道とかです。目健連尊者のお母さんが餓鬼道におられて、それをあゝいう羅漢さんですから餓鬼道をみ通す車ができました。餓鬼道を見てみると自分の母が、非常におなかが減って、食べ物食べられないで、餓鬼になって苦しんでおられる。そこで目健連尊者がお母さんに食べ物供えて食べさせようとすると、全部その食べ物火になって、母の口に入れる事ができない。そこで大変悲しんで、お釈迦さんに相談して、どうしたらいいんだらうと言って相談すると、お釈迦さんが七月十五日に、古代のインドではアンゴ、アンは安心の安、ゴは居ると言う字、「夏安居」と書いて、ゲアンゴと言う行事がある。インドでは、旧暦の四月十五日から七月十五日、三ヶ月間お坊さんが、勉強する期間があるんです。これは中国でも日本でもその習慣を受け入れまして、大体、旧暦の四月十五日から七月十五日まで、お坊さんが三ヶ月間、研修会みたいに毎日、朝から晩まで、勉強会をやる。日本ではその三ヶ月間、勉強致しますと、藤ふじが一つ加わると言います。あの「藤たけた美人だ。」



とか、「上藤」ともいう。藤という字で。四月十五日から七月十五日まで三ヶ月間勉強しますと、一藤加わったと言います。だからお坊さんでも、老僧になりますと、藤三十。藤三十五などと、夏安居の勉強を三十年やった。三十五年やったという僧がいます。こういう勉強をずっと閉じ籠ってやった人です。

インドでは、四月十五日から、七月十五日、モンスーンの期間です。モンスーンの期間は、一番蒸し暑い時期ですから、閉じ籠って勉強するのは大変です。勉強を終わりますと、我々でも打ちあげという事をやりますが、その打ち上げを、七月十五日にソウジシといってやる。ソウは坊さんの僧です。ジは自分の自です。シはほしいまゝにするという、次という字の下に、心。「僧自恣」といって、その日は、御馳走を食べてもよろしい。三ヶ月間禁欲をして勉強をしていた。三ヶ月終わったら、打ち上げて御馳走を食べられる。お釈迦さんが、目犍連尊者に対して、お母さんの餓鬼の苦しみを救おうというならば、僧自恣の七月十五日に、大勢のお坊さんに、百味の御馳走を下さい。百の味とは、いろんな御馳走です。お坊さんに御馳走して供養下さい。そうすると、お母さんの魂も餓鬼道から救われると、仰言った。これが仏説、孟蘭盆経うらばんきやうに書いてある。日本の国では、推古天皇の十四年に初めて、その孟蘭盆の行事をやったと「日本書紀」に書いてあります。推古十四年と申しますと、聖徳太子が十七条憲法を作られたのが、推古十二年ですから、その二年後です。そのもう二年後、推古十六年になると、有名な小野妹子が隋に使

をして、その時に、裴世清はいせいせいという隋の人を連れて来ているころのことです。日本では、その推古十四年に初めて孟蘭盆ぼらんぼんということをやった。

ところが、そのインドでは、七月十五日にそういうことを始めたのですが、既に、お釈迦さん以前の、所謂バラモン教の時代に、既に、その源流になるようなピンダという習慣があったそうです。七月十五日あたりに、農業行事が終わった後、いろいろな御馳走を神々に供えた。バラモン教は多神教で、仏教時代になると、いろいろな神さんが皆仏教の守護する、つまり帝釈天とか、摩利支天、增長天、持国天、広目天などです。吉祥天という、女の美人の姿もあります。皆、バラモン教の神様だった。十二神将や四天王とか、みんなそうです……こういう神々に供物をささげる習慣があったんだそうです。ところが、これが七月十五日というのが、中国に入りました。中国では漢代の終わりか六朝初期あたり、道教が、二、三世紀ごろから、だんだんと発展して参ります。その源流は、戦国の時代の老子や荘子の老荘の教えから始まって、だんだんと民間信仰になって来ます。そうすると、この道教の方でも、何か仏教を取り入れたようなお祭り、上元中元、下元にお祭りをする。上元というのは、正月十五日。中元が、七月十五日。下元が、十月十五日です。我々、お中元というと、自分の平素お世話になってお医者さんとか、上役とか、自分の結婚の仲人をしてくれた仲人さんとか、学校の先生とかに、お中元なんて持ってあがる風習をさします。日本ではそういう事になったんですが、中国では上元の正月十五日、それから中

元の祭りなどというものは、火祭りをやって、火を盛大に焚いたり、或は中国では、上元観燈かんとうという風習が有ります。上元、正月十五日には、たくさんの提灯を竿に並べたりして、そして、爆竹を鳴らしたりして、火祭りをやる。その火祭りというものが、日本では、正月十五日では、左義長さぎちやうになります。

中世の記録、公家さんの日記では、三と、毬まわと、杖という字をあててサンギツチョウと読まされています。やはり、竹のようなものを、ドカンと爆発させたりしたようです。現在では正月十四日・十五日に、関東地方なんか、まだよく、とんどとんどと言って、よくやっているようですが、お正月の松飾り、門松、竹だとか、標繩しめのなわだとかを、村境や広場に積み上げて、盛大に燃やす。たいてい村境に、道祖神、さいの神を祭る。その前に積み上げて、燃やす。そうすると、悪い事が破れて、一年間、幸福に暮らせるとか、お習字の紙を、放り込んで、その灰が高く上がると、字が上手になるとか、勉強がよくできるようになるとか、そういうことを言ったりします。だいたい中国の爆竹は、ドカンと竹を爆ぜらす。これもやはり、火と音による一種の悪魔祓い。年頭の悪魔祓いです。火祭りというのは、だいたい悪、イーヴルスピリット（evil spirit）、悪霊、邪霊、悪いものを、焼き払うというような意味がありました。もう一つの考え方は、燈火を掲かかげることによって、良い神さんを迎え入れる。魂を迎えるのに、燈を用いるのです。お盆の方は、爆竹なんかではなくて、ご先祖さんの祭りで、ご先祖さんの魂を迎えるのに、迎え火と送り火を、

用いるというふうに、やってきております。

中国では民間信仰が、道教と習合し始めたのが、後漢の終わりから、三国、あるいは六朝の初めというようなことを申し上げました。

元、ないし、明の時代、日本でいえば中世、鎌倉時代の終わりか、室町時代の初めごろから、その習俗もだいぶ変わって参りましたようで、大きな藁や木で作った舟で、長さが十メートルもあるような、大きな：この部屋の端から端まであるような大きな舟を作ったりして、それに供養の物を乗せて、焼いたりする、川に流したりする、というような、風習が始まったと申します。日本でも、お精霊しょうらいさんという、ご先祖さんの靈魂は、七月（または八月）十三日の夜、お墓から迎え火で迎えて来る。地方によっては、蠟燭を付けたり、火を燃やしながら、墓からお精霊さんを迎えてくるようなことをやる。ところが、今度、送る時には、小さな舟をこしらえて、それにお供えの胡瓜、茄子、西瓜、お寿司などの食べ物に蠟燭を乗せて流す。地方によって、迎え火は、高い柱を立て、その上に提灯を掲げたりして、ご先祖様の靈魂を迎えたりするという、いろいろ地方によってご先祖様の靈魂の迎え火、送り火のやり方があります。どうもそういう風習は、中国の元の時代から明の時代に始まっているような記録があって、日本の禅僧などが、鎌倉時代から、室町時代すなわち、南宋、元、明の時代に、中国に参りまして、勉強して、向うの風習を色々取り入れて来たんじゃないかと思われる節があります。

食べ物でも、えふさいぜんじ宋西禪師が、お茶を、鎌倉時代に中国から入れてきたとか、うどんも、鎌倉時代に、入れたとか、饅頭なども皆、鎌倉の末か、室町の初めに、中国でお坊さんなんかが学んできた。お茶は座禅の時の、眠気覚しで、お茶を飲む風習を入れてくる点心。中華料理の、かんとう広東料理の方でヤムチャーと言っております。饅頭とか、麵などを食べる。おやつのようなものを食べる。中国からそういう風習を入れてきているわけです。同時にそういうご先祖の祭り方のようなものを、明の時代にだいぶ学んだんじゃないかと思えます。先程、元・明の時代に、大きな舟を作ったりして、それを焼いて川や海に流すというような事を申し上げましたが、隠岐の島にお盆のころ行きますと、藁で大きな舟を作りまして、日本海に流したりしておりました。あゝなるほど、ああいうことをやるんだな、と思いました。日本では隠岐の島以外にはそんな大きな舟をお盆に流すというのは、知りません。どこでもちっちゃい舟のようです。

私が昭和五十一年十一月初旬にタイに行った時、空港からバンコックの市街に行く途中、今夜はお祭りだと言って、川に沢山の燈をのせた小さな舟を流しておりました。……そういう舟に燈を乗せて流すという風習は、盆、正月以外にも有ります。例えば、三月三日のお節句に、鳥取県の千代川せんたいという川で、流し雛をやる風習が有ります。お雛さんを千代紙で作ったりして、それを小さな舟に乗せて、そしてお供えのおもちだとか、白酒だとか乗せて、流す風習があるんです。これはもとは、節句と言えば、皆、あっちでもこっちでも、やったんじやないかと思えます。

お人形というのは、自分の罪や汚れを、自分の身代りの人形に移しまして、それを川に流すことによって、罪、汚れを祓うという。ですから、六月末の大祓、十二月末の大祓にもやる。つまり、盆・正月を迎える前に、六月の最終日に、この自分の汚れを、人形に移しまして、人形ひとがたに移して流す。大晦日、十二月の末にもそれをやる。これが大祓で、「延喜式」に、大祓の祝詞のりとというのがあります。川に罪・汚れを流しますと。それを川の神様が、海へ持って行く。海の辺つ神が、沖の方の底に居る神さんが、パクリ、パクリとそれを飲み込んでしまうと、日本中に、罪・汚れがなくなってしまうという、大変、日本人の樂觀的な、罪・汚れに対する考え方が書いてあります。

中国で、一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日という日を、節句と言ってありますが、これが、日本に入ってきて、特に、三月三日、五月五日が有名になりました。三月三日が桃の節句で女の子のお祭りになってしまいました。お雛さんは、夫婦雛を作って流す。五月五日の方は、男の子の節句という事になりました。桃の咲く三月。桃はだいたい、中国で罪・汚れを祓う力を持っている植物だと言われているんです。一説ではありますが、桃の実は、女性の陰部の形をしておりまして、この女性の陰部は、偉大な生産力をもっているのです。罪・汚れ、悪霊・イーヴルスピリットを祓う力を持っていると、言われているんですね。

それから五月五日の方は、菖蒲の節句などと申しまして、菖蒲を軒のところに挿したり、菖蒲

湯といつて、お風呂に、菖蒲を入れて、そこに入ります。同時に、蓬を菖蒲に添えて、軒のところに挿します。蓬は薬草として、大変薬効が有るので、今のように、海人草というような、虫下しの薬が発見されるまでは、蓬が虫下しのいゝ薬だったわけですね。菖蒲の葉は、剣の形をしているので、ああいう先の尖った植物というのは、鬼の目を突くと申しまして、そういうイーヴルスピリットが目を突かれるので、怖がって近づかない。剣の形の葉という事から、だんだん男の節句になっていったんじゃないかと思えます。五月五日に、鯉幟を立てます。あれは神さんを招く柱に、吹流しを付けた風習から来たので、その吹流しは江戸時代の終わりぐらいから、誰か吹流しの代わりに鯉を付けたんですね。そうすると、大変、景氣がいゝ、というので、あゝ、いうふうな事がはやるようになったと思うんです。元来は、やはり三月三日のように人形を作って、罪をつけて流した。それが菖蒲が剣の形をしているとかですね。これについては、唐の太宗たいそうが有名で、病氣の時に夢の中で鍾馗という人がいて、その鍾馗が、剣を持って、鬼を祓った夢をみたという事から、特に剣に菖蒲というものが、結びついてきたというような説があるんですが、とにかく三月三日にしろ、五月五日にしろ、或いは七月七日、九月九日でも、そういうふうな節句は神を祭る日でした。

七月七日は、実は、お盆の七月十五日の一週間前ですから、お盆の精進を始める日でもあるんです。竹を立てますが、竹の葉というのは……或いは、竹自体が先が尖っておりますので、悪霊

邪靈を祓う力が有ったというふうに、考えられる。それが、牽牛星と織女星が川を隔て、接近するという故事にひつつけられて、牽牛、織女のお祭りの日と言われるようになったんですが、やはり、正月は、松の葉も先が尖ってるんです。松、竹、梅、皆そうですね。三月三日は、桃。五月五日は菖蒲。七月七日は竹。それから九月九日の菊というのも、これは香りの高い、清らかな、香りがしますんで、その香りによって、悪いスピリットを追っ払って、清める力があるという菊の節句だと言われているんです。全部こういう、節句と言われる日は力のある植物によって罪を祓い、神を祭って、そして自分の罪、汚れを人形に移して流した祭りと言われているわけです。

元、明時代に入って、舟で霊を送るようになったと、申し上げましたが、今晚、八月十六日の夜は、大文字の火の他に、舟の字を北山の方で燃やす所が有りますね。妙法、舟、それから左大文字。妙法は、もちろん、妙法蓮華經というお経が、非常にお経の中で尊重される。特に、女の人が、妙法蓮華經によって、救われる、という信仰が、非常に広まりました、法華經と言うお経が、読まれるようになりました。法華經の中には、龍女の成仏と申しまして、女の人は昔は、差別されて、女は罪が深いから、成仏できんとか言われているんですが、経の中では、龍女が、男に変えてもらって、成仏するという巻があるんですね。だから、国分寺を作った時に、国分僧寺の方は、こんこうみんしょうさいしやうおんぎやう金光明最勝王經を、根本經典として、国分尼寺の尼寺の方は、法華經を、根本經典とするという事がありました。特に、日蓮宗は、日蓮さんが法華經を大切にされた。日蓮が鎌倉



中期に出られ、日蓮宗が随分、室町末期に盛んになり、京都の町衆には、日蓮宗の信者が多いわけです。妙法という字の火は、やはり、日蓮宗の盛んになった時に作られた。それから、大文字の火なんかも、もちろん、お精霊さんの送り火なんです。あれ、大という字を、何で書くかと……。一説では、元来火だったというんです。で、この火という字は、人の両側に、二つ点を付けるんですが、その火をくつつけてしまったと、両方の点を真中にくつつけると、大になるんですね。だいたい、送り火だから、火だというんです。さあ、私は本来は、どういう事だか、よくわかりませんが、それも一つの考え方だと思えます。お盆の終りの大文字の五山の送り火が、始まりましたのは、室町時代の末期か、戦国末期と、言うんですが、十六世紀末か、十七世紀の初めごろに始まったんじゃないかならうかといわれております。江戸時代にはもう始まっておったんですが、起源につきましては、もう一つ、明確に資料がないんじゃないかと思えます。

お盆と道教の中元とが、ひつついてきますが、あの中元の贈り物をするという風習が、仏や餓鬼への食べ物いきみたまの供養という風習とひつつくんです。日本では古来八月一日に、生御霊いきみたまと申しまして、生きるという字と、それから、ミタマは、御、という字と、玉、あるいは、魂の字を当てるんですが、生御魂という習慣が有って、これは、タノミの節句とも言えます。が、タノミとは、稲をタノミ（田の実）と申しますが、もう一つは、自分が頼んだ人。自分の主人を「たのうだ

人」と言うような事を中世の狂言なんかでもよく言います。つまり、自分の親、殊に親が生きておりますと、その生御霊には栄養のある鯖を食べさせるといふんですね。お魚を親に食べさせる、或いは、その自分の主人、或いは、自分のお世話になっている人に、食べ物の特に、米類、ないしはそれに類する食べ物と、お魚のようなものをあげるといふんですね。お中元が、タノミの節句にひつついてきた。八月一日と、お中元すなわち、旧暦の七月十五日と、わりあいに近いんですが、そういう贈り物では、お正月では、お年玉をあげる風習が、有るんですね。お年玉というのは、今は目上の者が、子供や、孫や、甥や姪が来たといふと、五千円やったとか、一万円じゃ多過ぎるとか。子供が、十万円溜めたとか、よく言うんですけれど、元来は、お年玉とは、自分の魂を、頼んだ人、世話になっている人にあげる。だから、そちらの方は、お歳暮になってしまつて、お年玉といふと、今度は偉い人の方が、目下の者にくれてやるのが、お年玉になってしまつたんです。お歳暮も、お中元も、盆・正月といふ、一番日本人にとって、大切なお祭りの時に、自分の御世話になっている人のところへ、自分の雲魂をあげる代りに食べ物とあげるといふ習慣です。これは、同時に、お坊さんに、夏安居の僧自恣の時に、沢山のお振舞をする。それから万霊ばんれいの供養といふのが、もと有りまして、今でもお盆のご馳走の横に、餓鬼棚といふのを作りまして、餓鬼のために、ご先祖さんの他に、別のお膳を作りまして、餓鬼のためのお素麺だとか、お寿司だとか、お菓子だとか、供えます。やはり、万霊を供養するような意味と、日本的な中世

の生御霊という行事は、中世のお公家さんの日記では、わりあいよく出て来るようになります。

古来のインドの習慣が、中国に入り、中国の道教と習合し、さらに、また日本にも入り、お正月とお盆のころ、半年置きに行うというのが大変、面白いと思います。

今、お正月というと、一月一日にやりますが、元来、お正月でも、小正月の正月十五日、陰暦では、一年の最初の満月の夜です。お盆では、旧暦の、七月十五日が、満月の晩です。

今日の八月十六日は、ちよつとずれておりまして、十一夜か、十二夜くらいですね。満月ではないでしょう。ちよつとまだ、半月をちよつと過ぎたぐらい、十一夜ぐらいじゃないかと思うんですが。だから、本来の陰暦で言えば、今年のお盆は四、五日後でやるべきところなのかもしれません。柳田国男さんは、元来は、その小正月、正月十五日が今よりもずつと、大切な晩であつたと、言われるんですね。それが、やはり、だんだん陽暦中心になって、一月一日の方を大切に、さらに言えば、大晦日という事が、非常に大切にされるようになったとされています。

旧七月十五日は民俗学の方では、豆名月といえます。豆の収穫期です。我々、ビールを、枝豆で摘まむのは、ちよつと、今のシーズンなんです。旧八月十五日の方も芋名月と申しますかね。ちよつと、これは、農業の方で申しますと、小芋の収穫期です。旧暦の八月十五日は、中秋の名月は、芋の収穫期。芋とは、里芋。小芋の事です。ご承知のように、じゃがいもと、薩摩芋は、南蛮渡来でありまして、つまり、日本の古来にはなかったものです。じゃがいもも、薩摩芋も、

原産地は、中南米であります。コロンブスのアメリカ発見によって、まず、じゃがいもも薩摩芋も、ヨーロッパへ、南蛮人、スペイン人や、ポルトガル人が、持って行って、それがずっと回って、日本へ、江戸時代になってから、入って参りました。ご承知のように、第八代將軍徳川吉宗が、特に、薩摩芋は、日本に適作だということで、青木昆陽に命じて、栽培させた有名な話があります。あれ以来、非常に日本は、飢饉が救われるようになった。餓死者が少なくなった。で、ヨーロッパで言えば、じゃがいもが、あれは、わりあい寒い所で、出来ますので、特に、アイルランドとか、北欧は、非常に飢饉が多かったので、じゃがいもによって、餓死者が減ったと、言われているんですが、日本では、古来お芋と言えば、山芋と、それから里芋でした。ああいう芋は、東南アジアに多くて、東南アジアでは、山芋に当たるものを、ヤムと言ってますね。それから、里芋の事、タロと言ってますね。私は、山の芋というのは、ヤムイモと語源的には、関係が有ると思うんです。タロイモ、里芋が、日本では非常によく食べられた。そして、弥生時代、西暦、紀元前二、三世紀ごろに、稲が渡来致しますが、それ以前の原始のころにおきましては、粟、稗も有ったかも知れませんが、とくに、山の芋、タロイモという物が、縄文の中期ないし、後期においては、かなり、原始農業として、食べられていたんじゃないかと思えます。

柳田さんなんかも言われるんですが、八月十五日の、中秋の名月に、主食であった山の芋に似せた、団子、あれ、お団子。こんな白い、このくらいの団子。三方の上に積んで、お月さんに供

えます。あれは、元来白いタロイモに当たる、里芋を月に供えたのだと、言われるんです。  
つまり芋の収穫感謝の日でありました。

(仏教大学文学部教授・関西大学名誉教授)